一人暮らしの高齢者の常座をめぐる考察

高齢者の住居における居場所に関する研究 その1

A DISCUSSION ON "JOUZA" IN HOUSE OF THE SINGLE ELDERLY

A study on appropriation of places in the house for the elderly-1

古賀 紀江*, 高橋 鷹志**

Toshie KOGA and Takashi TAKAHASHI

The house, as an environment with which the elderly interact, is discussed in this paper based on an analysis of places (within the house) that the elderly prefer in their daily lives. The analysis focuses on the particular places in a room where daily activities take place and constitutes the study of a smaller scale environment than other previous studies have handled. Preferred places are categorized, by the purpose of activity at a given place, into 'JOUZA': a habitually preferred seating place where the elderly spend most of their time for multiple daily activities, 'KOZA': a particular seating place for special activities, 'SEWAZA': a place where plants, fish, etc., are kept, and other places. Features of the environment that the elderly themselves construct in their houses are clarified by this analysis.

keywords : houses of the elderly, JOUZA(a preferred seating place for most daily activities),

KOZA (a particular seating place for special activities),

SEWAZA (a place where plants, fishes, personal items etc., are kept)

高齢者住宅、常座、個座、世話座

1. 研究の目的と概要

本研究の目的は一人暮らしの高齢者が住居内に形成する場に注目してその住まい方の特徴を明らかにすることである。

1-1 はじめに

私たちが日常暮らしている住居の内部空間には少なくとも二つの側面がある。一つは天井や壁、床によって限定された物理的環境で、「n・LDK」という記号のように用途や数として表現できる「居室、室、部屋」などである。もう一つは生活の中で個人が個別に体験し、認知している環境である。これは、必ずしも物理的に限定された空間として存在するものではなく、個性が強く、その境界は曖昧である。ユクスキュル (1934)^{*1)} は、『ある動物がなしている行為の数だけその動物は自分の環境世界において対象物を区別することができる』とする。つまり、行為は環境に意味づけをし、それぞれの動物にとっての「生物の見た世界」が存在する。この「生物の見た世界」と良く似た、個々人による個別の意味づけがなされた、一人一人が見ている独自の環境が住居内に形成されている。

従来の研究では、主として前者の立場から、室や生活者とその中で行われる主たる行為、そこを占有する居住者との対応から住様式を捉えようとしてきた傾向が強い。かつて西山 (1959)^{*2)} が「生活行為が行われる住空間の配列・構成によって、つまり一定のすみか他

の意味づけ(機能構成)で裏打ちされた住空間の構成・型として」住様式を捉えた様に、「室」の意味や機能を限定された複数の日常行為によって表わすことが多かった。こうした視点に対して保坂ら (1964)^{*3)} は、住空間が機能と室の単純な対応では成り立っていないのに暗黙の内に『一対一の対応としている』と指摘した。そして、『(室名と) 行為と一致しないことが多い』ことを実証するために『人間の意識から空間を捉え』る方法論を展開した。家具や行為を行うために必要な主だった道具を『大道具』とし、住居内で行われる行為ごとに対応する大道具のある場所『するところ』を捉えることによって、室を分析の単位としない、住空間の捉え方を示している。また、広部 (1989)^{*4)} も、従来の視点では『人の諸行為が一定の行為の単位に安定して分解できる』としていることに疑問を持ち、『行為に対応する空間単位の具体的な形態に対しての規定もできていない』として、計画学におけるそれらの姿は、現実に対して単純すぎることを指摘する。さらに、『住むということは何か、その中で人間と物との、人間と空間とのやりとりの実態はどのようなものであるのか』が十全に把握しきれていなかった』としている。

本研究でも、一人一人が見ている独自の環境世界とそれによって形成される場から住空間を捉えることを試みる。

1-2 研究の概要と意義

* 国立医療・病院管理研究所 協力研究員・工博

** 東京大学大学院工学研究科 教授・工博

Assoc. Researcher, Dept. of Physical Planning and Design, National Institute of Health Service Management, Dr. Eng.
Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Univ. of Tokyo, Dr. Eng.

本研究では、居住者が住宅内にとる場所（＝居住者の「座」）を中心に形成される生活・認知環境（＝「場」）を分析の対象とする。本研究の分析の単位とした座と場の定義は次の通りである。

座：個人が住居内で居る決まった場所である。本研究では、その場所を占めている時間の長短は座を規定する上では問題としない。

場：座で行う行為・動作に使用するモノとその配列、その時、認知される物的、対人・社会的環境とそれらの相互の関係の総合的な状況（主として生活環境）である。外に対する興味が強い場合座から外へ広がっている環境も場に含めて考える。

居住者の場の形成は住宅の計画の段階で予め予測されていることもあるが、現実には個人や家族が生活を始め、その住みこなしの過程で決められていくことが多い。今後の住まいの社会的寿命の延長や、公的集合住宅の質の改善の中において、場の形成過程に関する知識は必須の役割を担うものと考えている。多様な居住者の中でも単身高齢者にとって、住居内の場は生活上大きな役割を持っている。また、高齢者の夫婦世帯、友人同士、子供との同居などの、居住形態においては、場に対する多様な対応を迫られることになる。そこでは、居住者が能動的な場を形成をしやすい環境の提供や、居住者自身の場の形成に対する積極的な態度も求められる。

2. 研究の方法

本研究では高橋研究室で実施した「高齢者の環境行動」に関する研究⁽¹⁾の一環として高齢者の住居の観察・家具配置を含む住居プランの採取、日常生活に関するデプスインタビューによる調査を行った。

(1) 調査対象者

対象者は、東京都内のN及びAの2つの地区の65歳以上の全ての人を対象として行った環境行動に関するアンケート調査（1992）（参考1）の回答者の内、さらに詳細なヒアリング調査に応じた人である。二つの地区は面積、人口の面でほぼ同等の規模であるが、N地区は古くからの都市型住宅の密集する地域、A地区は1960年代に開発された集合住宅団地である。調査対象者とその主な特徴を表に示す（fig.1,2）。

(2) 調査内容

住居内部の詳細な図面をとること、（撮影の許可を得られた場合には写真撮影）とデプスインタビューによって構成される。インタビューは、①家の中の座の聞きとり②それぞれの座での過ごし方③座で行う行為に必要なモノの位置④座から見えるモノの説明⑤接客時の様子の聞きとりを中心とした内容である。ただし、本調査では、就寝及び調理、トイレ、浴室の使用に関わる行為場所は座として分析の対象としていない。

(3) 分析

以上のデータをもとに、住居内の座の分布、座での行為とその行為に関わる物品や道具及び環境（人や景色等）から場の状況を捉え、分析を行う。

3. 住居内の座と場

3-1 日常生活における座のタイプと特徴

3-1-1 常座・個座・世話座

一日の生活の様子と座の対応から、調査を行った全ての事例で家

SA	性別	年齢	ADL	居住年数	室数	座の数
1	M	69	12	29	3	1
2	F	78	13	30	2	3
3	F	79	12	9	2	1
4	F	68	11	20	3	2
5	F	68	13	30	3	4
6	F	78	13	30	2	2
7	M	68	11	30	3	1
8	F	74	11	7	2	1
9	M	69	10	5	2	1
10	F	85	13	30	2	4
11	F	67	13	30	2	2
平均		73	11	22.7	2.4	2

fig.1 A地区調査対象者の基本データ

SN	性別	年齢	ADL	居住年数	室数	座の数
1	F	80	12	43	3	5
2	F	81	10	52	2	2
3	F	80	13	64	4	1
4	M	72	11	45	4	2
5	F	79	13	33	2	2
6	F	77	13	45	2	1
7	F	75	10	35	2	2
8	F	76	11	53	3	4
9	M	67	11	3	1	2
10	M	65	13	15	3	1
11	F	65	11	36	3	2
12	F	65	10	30	2	2
13	F	68	9	43	2	3
14	F	67	13	7	3	2
平均		73	11	36	2.6	2.3

fig.2 N地区調査対象者の基本データ

に居るときに起きている時間の大半を過ごす座が見られる（fig.3-1～3-3）。この座は1例を除いて住居内の1箇所座で日常の食事行為や接客を行っている（ただしN地区に2例あった準世帯（SN4の下宿とSN9の寮）はこの限りではない）。接客のために別の座（接客専用の個座（後述）4例、その他の座1例）に移るのは、少数例である。客の多少、趣味の有無、社会活動の活発さの度合い等の違いによって座の様子は一人一人様々であるが、この座は、a）その人が家において時間を過ごす際に行う行為の殆どが食事行為を含めて行われ、b）SN13以外の事例では、この座から見るようにテレビが置かれている（テレビはつけばなしの場合も多い）。本研究ではこの座を「常座」と呼ぶことにする。同じ行為を別の座でも行う例や、複数の常座を持つ例は稀である。居住者があげた常座以外の座は、仕事のための机や趣味を行う場所の様に、ある目的のためのものが大半を占める。常座以外の座のうち、これらの座では、特定の家具と対応した個人的な活動が行われていることが多い。本研究ではこの座を「個座」と呼ぶことにする。

一方、居住者へのインタビューからは、特に本人は座として意識してはいないが、決まってある行為が行われる場所があることが明らかとなった。例えば、室内に並べられた植木や金魚などの動植物の置き場は、それらの「世話をする」、「話しかける」等の行為のための座となりうるものである。SA4の様に「毎朝、話しかけながら水をやる」という発言から分かる通り、鉢植え等の置かれている場所も座の一つとして捉えるべきである。こうした座として「仏壇」もあげることができる。仏壇は祈り等の場所として、はっきりと言及する人とならない人がいるが、「座」の一種としてみなすことができる。即ち、動植物や仏壇等は、飾りものとして見て楽しんだり精神的な支えや信仰の場とする以外に、日常生活のリズムをつく

fig.3 住居内での座の分布と一日の生活の概要

る役割を担っていて、日々居住者による働きかけの対象ともなっている。こうした居住者が何らかの働きかけをする対象を「世話座」と呼ぶことにする。調査事例では、fig.5、fig.7の表に示す様な世話座が見られる。

一人暮らしの高齢者の日常生活の多くの行為は常座に集まる傾向が見られるが、それ以外に、個座、世話座があり、それらを併せて高齢者各人の住まい方の特性を把握することが可能となる。

3-1-2 常座、個座、世話座以外の座

一人暮らしの高齢者の住居内には常座、個座、世話座とは異なる特徴を持った座も見られる。この座では常座や個座等の他の座と同じ行為が行われる場合もある。例えばSN12が2階のベッドにとる座がその例で、ラジオを聴いたり、常座で読んでいる本を持って行って読書をしたり、時には電話もする。一人暮らしの高齢者の住居ではこの様な座は多くはない。しかし、多人数の家族の住居の中では、個人的に占有する場所としての性格が強い常座よりも、個別の行為に対応する個座や色々な行為を行える含みも持ち合わせた居場所としてのその他の座が大切になると予測される。

3-2 常座を中心に形成される場の特徴

はじめに、常座に形成されている場の特徴を分析する。

3-2-1 常座とそこで使用する道具、物品との関係

常座では、食事やその他の飲食のための用意以外は行為に使う道具や物品をとりに行く必要がないようにそれらが身近に用意されている場合が多い。道具や物品は意識的、あるいは無意識的に座のそばに置かれたり、収納されたりしている（fig.8-1～8-4）。行為に必要な道具・物品を常座のそばに置かず、移動してとり寄せる人も数例見られる（fig.8-5）。移動してとり寄せるという行為は、座にいて手を伸ばしてとる場合と大きく異なるので、セッティング行為と呼

ぶことにする。fig.9は、常座の周囲の物品の分布状況を写真から読みとりカウントしたものの平均である。この結果から行為に必要なと思われる物品や道具、それらを収納している家具は手を伸ばせば対象物に届く範囲1m以内にあり、常座ではセッティング行為が少ないことが分かる。

3-2-2 常座のしつらい

今回調査対象とした2つの地域の一人暮らしの高齢者の常座には、座にある家具や、座の向きについて次の様な傾向が見られる。①常座には、必ず卓がある。②床座が多い。調査では25例中22例が座卓である。（ただし、SA10は座卓とテーブルの双方に常座をとっている）③常座は、窓などの開口部や、玄関等の入り口から人が入ってくる動線が視野に収まる向きをとる事例が多い（17/25）。④テレビはSN13以外必ず視野の中に入っているが、電話はその限りではない。⑤訪問者の座は、常座の正面よりも隣り合った辺にとられることが多い。

3-2-3 場の形成に関わるその他の要素

場の形成に関わる道具や物品以外の要素として3-2-2で得られた常座のしつらいの持つ一般的な傾向から次のものを上げることができる。

（1）眺め：常座からの眺めを特に強調する人がある。景色としての外部の環境を常座から直接知覚できることが場の形成の上で大切な要素の一つである。

（2）外の情報を捉えやすいこと：常座の位置は外の情報を捉えやすい向きにとられている。特に、都市型住宅地域のN地区では常座が玄関に面した室や玄関を直接見通せる室に玄関を視野に入れてとっている事例が13例中5例で、玄関を開け放して外を窺っていたり、近所の人が声をかけて通りすぎたりといった事例が見られる。

fig.4 住居内の座の分布マップ A地区

	常座	個座	その他の座	合計	世話座
SA1	1.こたつ			1	仏壇
SA2	1.座卓	2.キヤート、歌 3.机 仕事		3	仏壇、鉢植
SA3	1.こたつ		2.布団の中 読書、ラジオ	2	仏壇、サボテン
SA4	1.座卓	2.鏡台		2	仏壇、鉢植
SA5	1.テーブル	2.机 仕事 3.按摩椅子		3	仏壇
SA6	1.ベッドと テーブル	2.こたつ 接客専用		2	仏壇、鉢植、金魚
SA7	1.テーブル			1	鉢植、仏壇
SA8	1.座卓			1	仏壇、鉢植
SA9	1.こたつ			1	
SA10	1.テーブル 2,3.こたつ		4.踏み台 景色や植木鑑賞	4	仏壇、鉢植
SA11	1.こたつ	2.こたつ 接客		2	鉢植

fig.5 住居内の座の種類内訳 A地区

玄関の鍵を常に締めて、外部からの侵入者に対する備えをしていると口にする人もいるが、この人の常座も玄関の方を向いている。(玄関の方を向いていないが玄関を直接見通せる室に常座がとられている事例は3例。)また、SN5は玄関に背を向けていながらTV付きインターフォンによって訪問者を知ることができる様に工夫をしている。集合住宅団地のA地区は、プランの特性から上述の様な現象は見られないが、玄関からの動線方向を視界に入れるという点で傾向が一致している。また、訪問者の座を常座と隣り合った位置

にする場合が多く見られるが、常座の正面方向には、玄関からの動線がある場合が多く、この様な位置関係をとれば、外から入ってくる者に対する視線は遮られないで見ることもできる。

(3) 客もテレビが見られること：常座では、SN13以外は決まってテレビを見る。常座で接客することが多くその位置は(2)で述べた様に常座の正面を避ける傾向があり、客と一緒にテレビを見ることができる。インタビューでは、気楽な関係の人の行き来の方が、正式な接客よりも圧倒的に多く、常座のまわりでは所謂、上座・

fig.6 住居内の座の分布マップ N地区

	常座	個座	その他の座	合計	世話座
SN1	1. こたつ		2. 座卓, 接客, 作業 3. 座机 作業等 4, 5. 座敷 作業等	5	植物、鉢植え 仏壇
SN2	1. 座卓		2. 布団 テレビ	2	仏壇
SN3	1. 堀こたつ			1	仏壇
SN4	1. 座卓		2. 布団読書、ラジオ	2	
SN5	1. こたつ	2. 鏡台		2	仏壇
SN6	1. 座卓			1	仏壇
SN7	1. こたつ	2. 座敷 接客		2	仏壇
SN8	1. 座卓	2. テーブル 造花 3. シンク 作業台	3, 4は手芸の座 2は作業用	4	仏壇
SN9	1. 万年床	2. 道具箱の前		2	
SN10	1. 座卓			1	仏壇
SN11	1. 座卓1	2. 座卓2 接客		2	仏壇, 植木, 猫餌場
SN12	1. 座卓		2. ベッド 読書、ラジオ	2	仏壇
SN13	1. テーブル	2. 机 仕事	3. ベッド テレビ等	3	仏壇, 金魚, 鉢植
SN14	1. 座卓	1' 冬用		1	

凡例

- 常座 ○ その他の座
- 個座
- 世話座 (分布の状況を示した)
- 仏 仏壇 (世話座)
- 電話
- /// ベッド
- 卓 ■ TV
- ▨ ベランダ部分

fig.7 住居内の座の種類内訳 N地区

下座の区別が無いという良い。

以上から、常座での場の形成には座にいて知覚される様々な情報に関わること、常座には窓や玄関を通して外部の様子を知ることができる様な情報を得やすい位置が選択される傾向があることが分かる。

3-3 生活の中での座、場の意味と価値

本研究の調査から2年後に行った調査^(注2)では、世話座が保存さ

れている例が比較的多く見られた。従って住居を移動する際など、新しい環境下でも「花を育てる」「小動物を飼う」といった小さな習慣を続けていく座がとれるかどうかは重要な点である。

また、住居内のモノ全てには一人一人の思い入れがあり、高齢者の場合思い入れは特に強い。高齢者が生活の中で持ち続けてきた数多くの古いモノに込められた気持ちの強さは、自宅から老人ホームなどの居住施設へ移転する高齢者に関わる諸研究でも指摘されてい

SA1
手を延ばせば届く位置に必需品を入れたワゴン、品物。
趣味のビデオのためのテレビやカラオケのためのラジ
カセがある。

fig.8-1

SA4
テーブルの上に様々な生活用品。
置く場所は決まっている。

fig.8-3

fig.8 常座を中心に形成される場

る。例えば、自宅から居住施設への転居の際、長年使用してきた家具等の一部を施設へ持ち込めることは、場所が変わった後そこでの適応がうまくいくかについて大きく関係すると言う(外山1988^{*)}、大原1989^{*)})。大原(1989)は、高齢者居住施設への入所後、『インパクトの起きやすい時期があり、この時に生活基盤としての住居環境が安定していれば、危機を乗り越える上で有利になることがある』としている。その安定した住環境は、一般の高齢者にとって、『前住居からの家具等によって占められること』によって得られるという。

以上の研究では、高齢者が住居を移る時の家具やモノ自体を移動することの大切さを指摘してはいるが、移動に際して、旧住居内の座を中心にしつらえられ、形成された場に関しては考慮していない。しかし、家具やモノはそれぞれが持つ「意味」や「価値」の他に安定した環境における場を形成する要素としての意味を持つことから、モノを移すだけではなく座とモノとの関係を崩さずに前住居の「場」を移すこと、いわば「場の移設」ということにも考慮が必要である。新たな住まいに、前住居の家具を持ち込む際にも常座や世話座のしつらい方を崩さずに移行することは試みられるべきであろう。

4. 座と住居の室・平面との関係

4-1 座の数と室数

調査事例では住居内の座の数は一人約2箇所である。尚、本研究では就寝場所は座としてカウントしていない(ただし、SA6はベッドに腰かけテーブルと組み合わせた常座、SN9は布団の上に座するという形の常座である)。住居内の座の数は2カ所の人が最も多く(11/25)、最多はSN1の80歳の女性で6カ所の座が

SN5
後ろの戸棚に必需品や仕事道具。
脇に茶道具や電話。戸棚にはTV
付インターフォン。

fig.8-2

fig.8-4

SN13
常座は椅子座。常座にはほとんど
ものがない。必要な道具類は座を立っ
て移動して持ってくる。

fig.8-5

常座から の距離	地区	0.5m	1.0m	1.5m	2.0m	2.0m 以上
日用品収納	A地区	0 個	0.7個	0.5個	0.4個	0 個
家具の数	N地区	0.1個	0.8個	0.4個	0.4個	0.3個
置かれて いる物の数	A地区	1.6個	5.8個	2.7個	0.6個	1.2個
飾ってある 物の数	N地区	2.4個	4.5個	1.7個	0.9個	0.4個
	A地区	0 個	1.7個	1.5個	2 個	1.8個
	N地区	0 個	0.6個	1.8個	2.1個	1.3個

fig.9 常座の周囲に置かれているモノ個数平均

ある。この人は、調査時、夫を亡くした直後で一人暮らしになってまだ日が浅く、日常の生活にも夫の生前の生活様式が色濃く残っているという点で他の事例とはやや異なった性質を持っている(fig.5,6)。夫婦世帯、一人暮らし世帯とでは座のとり方の違いが予測できる。全体の傾向として住居の室数と座の数の間には若干の相関が認められるが、それほど強くない(fig.10)。

fig.10 住戸内の室数と座の数の相関

4-2 A地区(集合住宅)での1ルーム化現象

上の項の室数では、A地区でDKとそれに続く室を仕切の襖等を常時開放するなどして1つの空間として使用している場合には1室として数えた(床の仕上げの一致は問わない)。集合住宅団地のA地区ではDKのある平面形の住宅は11例中10例で、1ルーム化されているのはSA2、5、7、10、11である。これらは全て1ルーム化した空間に常座がとられている。

4-3 一人暮らしの高齢者の場の形成状況の典型

調査を行った一人暮らしの高齢者に見られる座のとり方とそこでの場の形成状況の傾向を図に示す(fig.11)。

一人暮らしの高齢者の住空間は、モノ、行為の両面で密度が高

く、セッティング行為の少ない常座に形成される場と、1、2カ所の個座の他、小動物や植木等に対する世話座に形成される場で構成されている。こうして形成された「場」は個人が形成し認知した環境である。従って同様の物的環境にあっても、異なる個人に対しては異なる場が形成されている。

fig.11 一人暮らしの高齢者の場の形成の傾向

5. 場の形成に関わる住居プランの影響に関する考察

場の形成には様々な個人的な特性（生活スタイル、趣味、性格など）が関わっている。更に、住まいの全体の空間構成、住戸プランとの関係に規定されるところが大きい。

5-1 住戸プランの影響（1）

	A地区	N地区	平均
住居内の座の数	2	2.3	2.2
住居形式	集合住宅	主に都市型住宅	
室数	2.5	2.6	2.6
居間の面積	13.5m ²	9.1m ²	11.3m ²
居間の座の数	1.4	1.6	1.5
居間での就寝行為	73% (8/11)	36% (5/14)	52% (13/25)

fig.12 調査結果の概要と2地区の比較 常座ある室を居間とした。

一人暮らしの高齢者の住居内での場の形成のされ方には、調査を行った二つの地域の間で、異なる点が見られる。fig.12は、二つの地区の座に関するデータの平均値である。これによると、室数から見た規模はほぼ等しいが、住居内の座の数はN地区の方が多く、常座のある空間での就寝行為はA地区の73%に対してN地区では36%である。この違いの原因の一つとして、両地区の住居のプランの特徴の違いの影響が推測できる。1960年代に開発されたA地区の集合住宅の住戸プランはn-DK型で、食寝分離と公私分離の原則にのっとった平面である。N地区は下町の都市型住宅で、玄関に直接つながる室を持つ場合が多い。下町のN地区の住まい方は家族の個室の確保よりも「オモテ」と「ウチ」の生活を区別することに重きが置かれている。家族が縮小して一人暮らしになった場合、住居内の座のとり方が、家族で暮らしていた時に比べて変化が少なくと予測されるのはN地区であり、一人暮らしになったことで住まい方の変化が大きいと見られるのは、計画時のコンセプトとは逆の食寝、公私不分離の状況が多いA地区である。A地区のプランは、家族の

中での公私の別を重視し社会への接面が小さいとすることができ、結果としてワンルーム的な住まい方を導いているのではないか。N地区は家族の中での公私区分は明確でなく時間的にやりくりされていたと考えられるが、社会への接面は大きく、これは一人暮らしになっても住まい方が大きく変わらないことの理由の一つにあげられる。高齢者にとって、住まい方を維持できることは重要であるし、また変えられることも必要である。そのためには、

(1) 家族の人数や構成が変化したときの住まい方の変化を前提とした計画が今後必要である。また、これまでも繰り返し言われてきたことだが、

(2) 住居として住まい方の変化を見越したプランの検討や、変化に対応していく住まいの供給を社会的に成立させる仕組みといった視点を持つことも必要である。

5-2 住戸プランの影響（2）

25の事例中SA10の1例のみ3ヶ所の常座をとっている(fig.13)。(常座1は、飲食や喫煙、テレビを主とし、常座2と3はテレビの他、趣味や接客等を主とするという緩やかな場合分けがある。日常は常座2や3で趣味の大正琴を弾き、常座1で一服というように3つの常座を行き来して一日を過ごしている。)SA10の特徴を示す。

fig.13 複数の常座を持つ事例

(1) 他の事例よりも住居内での動き（座の移動、セッティング行為など）が活発である。

(2) 同種の座が複数あるため、同じ行為を行うのに場所の選択が可能である。従って、場面の転換が多い。

(3) 常座の周囲の道具や物品は他の事例よりもコンパクトにまとめられて整理されている。常座を分散させているために物の集中が抑えられていると考えられる。

この例では、複数の常座による日常の場面の切り替えが行われており、一箇所に滞留した住まい方よりも日常的なレベルでの活動量（座と座の移動の様な単純なものも含めて）も多く、めりはりのある生活が営まれていると判断される。

座と座の間の移動やセッティング行為は体を動かす機会にもつながっている。例えば、セッティング行為を常座で積極的に行うSN13 (fig.8-5) は、健康のために少しでも体を動かすことを意識していると発言している。

また、家でする仕事を持つ人には仕事用の個座があり、常座との

間で場面の切り替えがあるが、仕事や趣味を持たない人は、常座で一日を過ごすことがほとんどで常に同じ場所で生活の場面が生起する。高齢者には住居内の生活時間が長い傾向があることを考慮すると、複数の常座を持つ住まい方は生活そのものにめりはりある適度の刺激のある暮らしを可能にするという点で、高齢者に良い影響を与えるであろう。

SA10の事例から複数の常座が成立している原因には空間的な条件が関与しており、DKと和室をつなげた細長い空間であることがあげられる。即ち、複数の常座を配することの可能な広さを有し、座からの視線のとり方によっては空間を一連なりに見渡すことも、分節することも可能な形態なのである。例えば、中廊下や壁で分節されたSA4の様な平面では、この様に複数の常座をとることは難しい（fig.8-3参照）。

5-3 場の形成への他者の影響

SN3はかつて看護婦寮や下宿に使われていた家であるためN地区では規模の大きな住宅である。常座は直接玄関を見通せる位置にはない。しかし頻繁にやってくる妹や近隣の人の出入りは台所にある出入り口が主体で、こちらは見通すことも可能である。この事例の常座は実際は乗り物の操縦席の様に手を延ばせば何でも手に入る様な場を形成しているが、よその人に見えないように「隠す」ために、必要な道具類は、後ろの戸棚に整理してしまっていて、細々とした道具類や小物は一切人目にさらされない（fig.8-4）。この家には下宿人が一人おり、隣に住む妹が日に何度も頻繁に出入りする。また、近隣の人の出入りも非常に多い。他者の存在や関わり方も常座をめぐる場の形成に影響を与えている。

6. 一人暮らしの高齢者のための住居計画への提案

以上の結果から一人暮らしの高齢者のための住居の提案を以下に示す。

①必要な室数や面積を満たすという条件以外に、座をとることのできる環境の計画、あるいは座からの計画といった視点が必要である。その場合予測すべき座の数は、本調査結果の2箇所程度より多く考える。座の数は一人暮らしになると減少すると予測され、そうした変化の過程に対応できること、多くの座をとることの効果（5-2）等が理由である。

②一人暮らしの高齢者の特徴的な座である常座のとり方の計画は重要である。常座では日常の食事をはじめとした飲食行為が行われるため、台所を取り込んで場が形成できることが望ましい。また、常座はたいていの場合1箇所であるが、複数の場合もある。複数の常座を可能にするには

7) 複数の座をとれる広さの室、あるいは連続した空間が必要である。
 1) 一人暮らしの高齢者の生活で重要な要素の一つであるテレビがどの位置からも見えることことも必要で、そのためにはSA10の居間の様な縦長の室空間が有利である。縦長のプロポーションの平面は視線のとり方による空間の統合や分節もしやすいと考えられる。

以上にに関して安定した場の規模に関する検討が今後必要である。

③複数の常座をとるには②の様な空間が有用だが、居住者の環境の変化に伴う座のとり方の変化に対応可能とし、個人の住まい方に選択の幅を持たせるためにも、空間の形態を固定せず、可動の間仕切り等によって空間の形態や数を可変にする。

④常座の周囲には必要な生活用品が集められる事が多いので、それをサポートするような家具（作り付けを含む）の開発も必要である。一箇所の常座に一日中いるという生活のスタイルをとることが体力が低下しても一人暮らしを続けることを可能にしている場合も考えられるので、重要な課題の一つである。同時に、使うものの準備や片付けという行為を通して、住居内の生活場面や活動量が多い生活を可能にする、セッティング行為を多く行うタイプの常座も提案したい。この場合は、座と収納家具との位置関係や使いやすさを配慮する必要がある。

⑤常座は必ずしも室内だけを意識したものではない、従って外部への場の広がり（外の景色、ベランダを眺める等）を促す装置としての窓を考える。

⑥世話座は長年の習慣の反映であることも多く、生活のリズムを伴うこととも併せて、世話座の場所（仏壇等の設置場所、動植物の置き場所等）や常座との位置関係を考慮することが必要である。

7. 今後の課題

家族での生活から夫婦世帯、一人暮らしという変化に対して、座やそこに形成される場が一步遅れて変化していくことが示唆された。また高齢者は身体や自身をとりまく友人等の環境の変化もあり、かつ変化の速度は他の世代よりも早い。以上の理由から、座の経時変化の調査分析が次の課題である。

*本研究は、高橋研究室による高齢者の環境行動的研究（1992-3）の調査に基づくものである。

注1）高齢者の環境行動的研究 高橋研究室 1992-3

注2）場の概念による住空間の研究—住居内での個人空間の形成について—（参考文献）第3章一人暮らしの高齢者の個人空間の経年変化に関する考察 1995 古賀紀江

<主要参考文献>

文1)ユクスキュル他 1934 動物と人間環境世界への散歩(1983 日高敏隆他訳 生物の見た世界所収 思索社)

文2)西山卯三 1959 住空間の型—小住宅における—新建築 34巻5月号

文3)保坂陽一郎他 1964 もう一つの空間 設計方法序説1, 2 建築文化 211号

文4)広部達也 1989 「住空間」素描 すまいろん 1989 春号 通巻10号

文5)外山義 1988 IDENTITY AND MILIEU A study of relocation focusing on reciprocal changes in elderly people and their environment 学位論文

文6)大原一興 1989 高齢者の生活拠点移動に関する建築計画的な研究 学位論文

文7)古賀紀江 1995 場の概念による住空間の研究—住居内での個人空間の形成について— 学位論文

(参考1) 高齢者の環境行動的研究概要

	7/9-1 調査時期	回答者/母数	回答時点での ヒアリング承諾者	ヒアリング実施		一人暮らし者 ヒアリング実施数		ヒアリング 実施時期
				男	女	男	女	
A地区	1992.6	433/1021	55	11	12	3	8	1992.12
N地区	1992.2	475/1019	174	12	14	3	11	1992.5

(1996年5月10日原稿受理, 1996年11月27日採用決定)